

—就職活動体験記—

昭48年卒 経営 浅田 恭正

六甲台就職相談センターには毎年延べ約2,000人の学生が相談に来ます。

学生たちの相談したいことは様々です。就職活動の初期には就活のやり方、流れ、今何をすべきかといった基本的なことから、就活が進んでくるにつれて企業の選び方、エントリーシートの書き方、面接対応の仕方、そして内定をもらった後は複数の内定の企業からどう選び決めるか、また辞退のやり方はどうすればよいかといったように学生によってまた就活の段階に応じて様々です。このような一人ひとり、また一つひとつ違う悩みや相談に対して7人の相談員が学生たちに寄り添って一緒に考え、アドバイスしています。私もその相談員の一人として、毎年多くの学生と出会い、ともに内定に向かって歩いていっています。今回はそんな学生の中の一人の女子学生を取り上げて、その就活を振り返ってみたいと思います。

彼女の就職活動は苦闘の連続でしたが9月に一部上場の大手メーカーから内定を勝ち取りました。彼女が内定の報告に来てくれた時に、就活体験記を書いてこの貴重な経験を残しておいてみてはどうかと私から提案しました。彼女がこれからその企業で仕事をしていく中で行き詰った時に、この厳しい就活の経験を乗り越えたことを振り返ればきっと役に立つと思ったからです。彼女はその日帰って一晩で書き上げ、翌日、センターに持ってきてくれました。それは素晴らしい体験記で感動的でした。そんな彼女の就活体験をコメントを加えながら紹介してみたいと思います。

その学生、法学部のAさんは民間企業を志望して、3年生の5月に就活を始めます。最初は特に関心・興味のある業界や企業はなく、まずは就活セミナーに参加して名前を知っている企業の話聞いて回りました。そしてネットから得た知識をもとに自己分析をし、インターンシップに応募して、就活支援業者のメンターにエントリーシートを見てもらったりしていきます。しかしインターンシップに応募した企業の多くは書類で不合格となります。その中でインターンシップに参加した企業2社から早期選考の案内をもらい、面接を受けますが結果は不合格。

そこで、受ける企業を見直してBtoBメーカーに絞って就活をし直します。エントリーシートを友達に何度も添削してもらい、本人としては万全の状態だと思って3月1日を迎えます。そこからエントリーシートを約20社に提出しますが自分が思う以上に落とされてしまいます。

そこでこのままではまずいと思い、4月半ばに六甲台就職相談センターに駆け込みます。その時対応した私を含めて3人の相談員がエントリーシートを読んでコメントを彼女に投げかけました。「このエントリーシートは中身が薄く作文になっている」と。彼女

は核心を突かれた気がしてその場で号泣します。その時のことを後から振り返って彼女はこう書いています。

「何度も何度も友達に添削してもらって作り上げたエントリーシートはいつの間にかすごく読みやすい作文になっていた」と。

彼女は相談員のアドバイスを踏まえ、持ち帰って自己分析をやり直し、すべてのエントリーシートを書き直して、翌日再度センターに来て見せてくれました。その内容は見事なエントリーシートに仕上がっていました。私は前日、厳しいコメントを返したことを彼女がどう受け止め、そしてどう修正しようとするのか内心とても心配していました。しかし彼女は改めて自分を見つめなおし、一晩でエントリーシートを見事に修正してきたのです。私はこの時、直感的に彼女の就活は成功すると感じました。他者の言葉を受け止め、理解し、そして自分で考える力があり、さらに行動に移すことができる学生だと分かったからです。

しかし、ここから彼女の苦闘が始まります。面接も何社か受けますが全てにお祈りメールが届きます。そして、6月に入って持ち駒はほぼゼロになります。そこからは就活リスタートセミナーに参加して、これまでみてこなかったIT業界に目を向けます。その業界は人材不足のため企業の方からアピールしてきたのです。その会社に応募して選考が進み最終面接まで進んでいきます。しかし結果は不合格でした。その結果をもってセンターに相談に来ました。私は「本当にその仕事がしたいのか、もう一度よく考えてみなさい」とアドバイスをしました。彼女は直ぐに業界・仕事の本を読んでみた結果、その仕事は自分が本当にやりたいことではないことに気が付きます。最後の砦と思っていた業界からも内定をもらえずまさにどん底の状態となったのです。

そして7月、就職留年という選択肢も考え。実家に帰って家族に相談しますが反対されます。そんな八方ふさがりの状態になった時、意を決して高校の先生に電話をし、これまでの経線や思いをぶつけます。そのとき先生から「今まで真面目に生きてきたのだから大丈夫」という言葉をかけてもらいます。彼女はその電話を切った時、「絶対に大丈夫」という自信が生まれてきます。体験記では「誰かにこう言ってほしかった」「その日の夜は久しぶりにぐっすり眠ることができた」と書いています。

季節は8月になりました。そこからの彼女の就活の歯車は良いほうに回転していくのです。自分を信じて、飾ることをやめ、面接でも素の自分を出していきます。その結果、大手小売業界3社、司法書士事務所から内定をもらいます。

面接を受ける姿勢がこれまでとは明らかに違ってきて、面接官から笑ってもらえたりしていきます。そしてその中の大手流通企業に行くことと決断し、内定承諾の連絡をして就活は終わったと自分としていったん決めるのです。

ところが、9月も半ばになった時、以前提出していた一部上場の手前メーカーから書類選考通過の連絡が来ます。実はその2週間前に図書館で勉強をしていた時、煮詰まってそのメーカーの創業者が書いた本を続んでいたのです。その本に勇気づけられて前向きな気持ちになっていた数日後に、その会社から法務職での秋採用の募集通知がきます。

なんということでしょう。こんなご縁であるのですね。彼女から私にメールで相談がありましたので私は「やるしかない、やってみなはれ」と背中を押してあげました。

体験記にはその企業に対する面接の様子がリアルに表現されていて吸い込まれてしまいます。

日く、「何でも聞いてくださいという気持ちで面接官の目を見つめた」

日く、「アルバイトの経験を聞かれた時、与えられた仕事を120%で返していくことを全力でやっていったら周りから信頼を得られた」

さらには、最終面接でこれだけは伝えたいと思って臨み、2次面接で面接官に言われた「正解がない中で人間として大切なことを大事にする」という言葉に素直に共感したことを面接の最後に伝えます。

そして体験記では、面接が終わった時、すがすがしい気持ちで「もう後悔はなかった」と言い切っています。

結果、見事に内定の切符を勝ち取ったのです。私の携帯に内定の一報をもらった時は私も本当に心から嬉しく思い、六甲台就職相談センターに相談に来てからの半年にわたる辛かった就職活動を振り返って共に喜び合ったものでした。季節は9月も終整になっていました。

この体験記を読んで私もとても感動しました。これまでの苦しかった就活体験と素直に向き合い、飾ることなく真拳に自分の言葉で書き綴っています。彼女はこの就職活動を通して様々なことを学び、そして大きく成長しました。この半年、彼女と一緒にきょう就活を進めてきた私としても格別の思いがあります。

一方でこの体験記を通して、相談員としていくつもの教訓を教えてもらいました。就活生は多かれ少なかれ彼女のような体験と悩みを抱えながら就職活動を進めてきています。そんな就活生に寄り添って力になっていくことが我々相談員の役割です。しかし我々が競活生と接することができるのは、ほぼセンターに来て相談に乗っている時間だけです。でも学生たちはその何十倍、何百倍もの時間を、思い、悩み自分の力で切り開いていこうと、もがいているのです。そんな就活生の実体験と心の叫びを我々相談員は理解する必要があります。そう思えば学生と会って話す何十分間という時間がどれだけ大事で、まさに真剣勝負で全力で学生に寄り添ってあげることの大切さを改めて感じます。

彼女の就活を振り返ってみて、その成功の要因はいくつか挙げられます。離局に対して引かず、あきらめず前に進もうとしてきたこと、周りの人たちの力を借りることを厭わず、自らその人たちのふところに飛び込んでいったこと、それらを踏まえて自らが考え、決断してきたこと。

でもこれらの要因は後から振り返った時にわかることです。彼女の一番の成功要因は目の前のことに逃げず、言い訳せず、やるべきことを精いっぱいやってきたことだと思います。この貴重な経験を大切な宝物として、これからの社会人としての人生に向かって胸を張って進んでいってほしいと願っています。

最後に、彼女が体験記の結びとして書いている文章を紹介してこの稿を終えたいと思

います。『とても現実とは思えなかった。本当に本当に長かった。何度も心が折れかけて、一時は本当に折れていたけど、諦めずに頑張りを続けたら、最後にとっても良い結果をいただくことができた。

今まで支えてくれた人たちに感謝の気持ちしか湧いてこなかった。辛かったけど最後まで頑張れたのは、周りの人の支えがあったから。

内定はゴールではなく始まりにすぎない。これからもっと正解のない世界で生きていけないといけない。でも大丈夫、今回の経験で最終的にとても良い結果をもらえたように、与えられた場所で精一杯花を咲かせよう。張り切りすぎず、落ち込みすぎず、やれることに精一杯取り組む。それだけで人生は十分なんだ。』

以上